

書店関係者にお願するページ

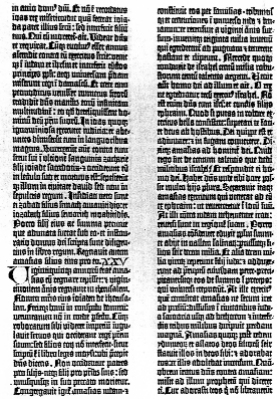
貴重な書物は永遠の輝き

(株)雄松堂書店 関西支店 小林 士郎

「光陰矢の如し」とはよく言いますが、月日が経つのは本当に早いもの。私自身も京都産業大学を卒業後、洋古書（西洋で昔に出版された本）を扱うこの会社に就職し、あっという間に8年の歳月が過ぎました。この8年間に多種多様な洋古書と接し、それらが持つ不変の価値に魅せられて参りました。本日はこの場をお借りして、洋古書の魅力について振り返ってみたいと思います。

まず簡単に書物の歴史についておさらいしてみます。記録媒体としての文字の登場は紀元前6千年紀頃のシュメール人やアッカド人の会計帳簿にまで遡ります。使用されていた文字は楔形文字で、粘土板に刻み付けられたものです。農耕の生産高や奴隷の数、借金の返済方法などが記録されていました。古代エジプトでは「ヒエログリフ（聖刻文字）」が誕生しました。絵文字のような様式ですが、話し言葉を文字に表したもので、あらゆる事柄を表記・記録する事が可能でした。そのデザインは大変可愛らしく、時に荘厳ですらあり「神の文字」とまで形容される程です。テレビや雑誌などで特集される事も多い文字ですので、その美しさを是非堪能して戴きたいと思います。

ヒエログリフはパピルスに記されていました。その後は羊皮紙が誕生します。羊や山羊、牛の皮をなめして加工したものです。パピルスは高価な上に破れやすく、片面にしか文字が書けませんでした。羊皮紙はこれらの欠点を克服した上、「色彩の保存」に優れていたのが大変流行しました。また、重ねて折りたたむ事が可能であったため、「冊子体」として保管できました。ここに現在の書物の源流を見ることが出来ます。羊皮紙を使って当時の修道士達はキリスト教の聖典を書き写す作業を始めました。王侯貴族や聖職者のために製作したこれらの写本は、文字や彩色の美しさ、装丁の豪華さなどにより、現在では優れた芸術品としても価値が認められています。先日、京都市美術館で開催された「フィレンツェ展」にも数多くの写本が展示されていたのでご覧になった方もいらっしゃると思います。



京都外国語大学付属図書館蔵「グーテンベルグ42行聖書（1葉）」

写本の次は活版印刷が登場します。1450年頃、ドイツの金銀細工師ヨハネス・グーテンベルグは葡萄の圧搾機にヒントを得て、大型の印刷機を開発しました。金銀細工の技術を応用して金属活字を作り、これらと印刷機を使用し、1455年頃西洋で最初の活版印刷物「四十二行聖書」を生み出しました。まさに世界の文化史における金字塔であり、知識の伝播を格段に改良し、後の世を大きく変える原動力になりました。過去2000年の中で最も世の中を変えた発明と言う人もいます。同時期に紙の流通も始まり、書物の製造はより速くなりました。その後書物は、挿絵の進化、サイズの多様化、出版業者の増加などにより、ひとつのメディアとして幅広く浸透していきました。

以上、大まかに書物の歴史を振り返ってみました。弊社ではそれぞれの時代で製作・出版された本を扱っておりますが、どの本にも当時の息吹を伝える輝きがあります。世の中に大きな影響を与えた名著や、刊行後何百年も経つのに保存状態が良い本などに巡り逢った時は、「よぞ僕らの元に来てくれた！」と喝采したくなります。これら貴重な書物を書誌データと照合し、著者の経歴や業績、伝えたかった事、出版当時の社会情勢等を丹念に調べ、お客様へお届けするのは胸躍る作業であり、仕事をする上で大きなモチベーションになっています。京都外国語大学の図書館は他に類を見ない貴重な本がズラリと揃っている事で知られています。図書館主催の展示会などを通じ、是非一度本物の洋古書をご覧になり、その永遠の輝きを味わってみて下さい。ご自分の世界を大きく広げられる事をお祈りしています。

こばやし しろう